学校評価についての話し合い（教員）

1　アンケート結果から見える現状

児童質問「先生に言われなくても自分たちから頑張っているか」

「最後まで諦めずに頑張る」　　全体として低めの結果となった。

一方で、「学校が楽しい」「みんなで何かをするのは楽しい」といった項目や、学年が上がるにつれて「しんせつ」などの項目が伸びていることから、子どもたちが学校生活や友達との関わりを前向きに捉えている面も見られる。

特に、総合的な学習などで「自分で選んで活動する経験」が、主体性につながっていると考えられる。また、5・6 年生では、班長や委員会活動などの経験を通して、相手を思いやったり人のために行動したりする力が育っていると考えられる。

しかし、「自分たちでやる機会」はあっても、子ども自身が「自分たちでやっている」という実感を十分にもてていないことが課題として挙げられる。

2　主体性を育てるための課題と今後に向けて

今後は、教師が先回りして指示・支援するのではなく、子どもたちが「やってみたい」「自分たちでやってみよう」と思える場面・対話する場を意図的に増やしていく必要がある。

そのためには、

〇ちょっとしたことでも褒め、認めることで「自分からやりたい」という気持ちを育てる。

〇低学年の段階から、子どもたちに任せる場をつくる。

〇失敗したり、うまくいかなかったりしてもすぐに口を出さず、挑戦する気持ちを大切にする。

〇子ども同士で教え合ったり、考え合ったりする場を取り入れる。

〇行事や学習の見通しをもたせ、「何のためにするのか」「めざす姿（ゴール）は何か」「次は何をするか」「自分たちには何ができるのか」などを考えられるようにする。

〇子どもの「やりたい！」「やってみたい！」という素直な思いを拾い、活動につなげる。

〇振り返りの機会を充実させ、自分の成長や仲間の頑張りに気付かせる。

といった取組が重要である。

3 「最後まで諦めずに頑張る」力を育てるために

単に「最後まで頑張ろう」と声をかけるだけではなく、挑戦することそのものを価値づけることが大切である。できた・できなかったという結果だけでなく、★挑戦しようとしたこと、★途中で工夫したこと、★友達と対話したり協力したこと、★失敗してももう一度取り組んだこと　などの過程を認め、言葉にして伝えていく。

また、「なぜ？」「どうして？」という子どもの疑問を大切にすることも、粘り強く考える

力につながる。疑問をもつことは、子どもが主体的に考えている証拠として捉え、すぐに答えを与えるのではなく、考える時間を保障していきたい。

4 「し・あ・わ・せ」の各要素を関連させて育てる

主体性や粘り強さだけを単独で育てるのではなく、「し・あ・わ・せ」に含まれる各要素が互いに関わり合っていることを意識して取り組みを進めるとともに、私たち教員の姿が子どもたちのモデルになっていることを意識する。また、子どもたちが考えたり対話したりする時間や場を確保する。

「あいさつ」

気持ちのよい、爽やかな挨拶ができる児童を見つけ、その姿を広げていく。また、教師と児童では「できている」と感じる基準に違いがあるため、教師から評価してもらう機会を設けるなど、具体的な姿を共有する。

「ありがとう」

「ありがとう」と言うことへのハードルを下げ、自然に伝えられる雰囲気をつくる。また、「ありがとう」と言っている児童を積極的に見つけ、その姿を認め、広げていく。

「わくわく」

新しいことへのチャレンジや、前向きな言葉を大切にする。また、周囲の人が「応援する」「待つ」「失敗を受け入れる」といった関わり方をすることで、安心して挑戦できる環境をつくる。

「先生に言われなくても自分から・自分たちから」

一部の児童の力に頼って活動している場面もあるため、特定のリーダーだけでなく、「小さなリーダー」が自然に生まれるような支援を行う。そのためにも、子どもたち自身が考え、決め、行動する機会を増やしていく。

5 具体的な取組

今後は、特に以下のことを意識して取り組んでいきたい。

〇「任せる・待つ・認める」を大切にし、子どもが自分で・自分たちで考え、対話し、行動する時間を保障する。

〇体育大会などの行事を、子どもたちが考え、決め、協力する機会として活用する。学団活動や異学年交流も主体性を育てる場として生かす。

〇効率を求める場面と、子どもたちに時間をかけて考えさせる場面を意識的に分ける。

〇ペアやグループでの教え合いを取り入れ、子ども同士の学びを促す。

〇一人一人が話す機会を設け、活動後の振り返りを充実させる。

〇「何をしたか」「どう思ったか」だけでなく、「なぜこの活動をしたのか」「どんな力が身に付いたのか（できるようになったこと）」「今後にどうつなげていくか」を振り返り、つぎにつなげていけるような時間・場を確保する。

〇「きらきらタイム」などを活用し、自分自身の成長を振り返ったり、友達同士で認め合ったりする機会をつくる。

〇ペップトークなどを活用し、当たり前にできていることも価値づけ、自己肯定感や次への意欲につなげる。

〇学級や集団の土台として「リスペクト」を大切にし、話したくなる環境、安心して話せる雰囲気をつくる。そのために「聞き方・反応・受け入れ・話し方」を意識して指導する。

6　今後の方向性

　今回の結果から、子どもたちには「自分からやってみたい」という思いがないのではなく、その思いを実際の行動につなげたり、「自分たちでやった」と実感したりする経験が十分ではないことが課題として見えてきた。

　そのため、教師が答えや方法を先に示すのではなく、子どもたちの「やってみたい」「どうして？」「こうしたらどうだろう」という声を大切にし、「任せる・待つ・認める」関わりを積み重ねていく。

　また、「し・あ・わ・せ」の各要素はそれぞれが独立しているものではなく、相互に関わり合っている。低学年の段階から、あいさつやありがとう、友達との関わり、挑戦すること、振り返ることなど、一つ一つの経験を積み重ねながら、子どもたちが「自分たちで考え、挑戦し、最後までやってみることができた」という実感をもてる学校生活をつくっていきたい。

　全体としては、「教師がやらせる」から「子どもがやってみたいと思える時間・場をつくる」への転換が、今回の結果を受けた大きな方向性になる。